

SUKHĀVATĪVYŪHA に於ける若干の問題

—— 中村元・早島鏡正 紀野一義 訳註 『浄土三部経』 を読んで ——

岩 本 裕

柳亮三郎博士将来の写本による足利惇氏先生の *Sukhāvātīvyūha* 梵本の公刊は目下着々と進行中の由であるが、この時にあたって最近に出版された中村元博士らの『浄土三部経』（岩波文庫）を純粹に学的な態度で問題にすることは、あながち無意義なことではないと信ずる。と言うのは、足利先生の *Sukhāvātīvyūha* 梵本は今後に於ける同文献研究の所依となるであろうことは必定であり、従って中村博士らの『浄土三部経』訳註は M. MÜLLER-NANJIO 刊本（荻原雲来博士の「本文刪修」を含めて）に依る研究・訳註の掉尾を飾るものであるからである。それと同時に、この書を論評することは、待望久しい足利先生校訂の *Sukhāvātīvyūha* 梵本の公刊を一層意義あらしめることになると確信するからである。

本稿の執筆にあたっては、MÜLLER-NANJIO 刊本のほかに、梵藏漢和合璧『浄土三部経』東京（昭6）所収の荻原雲来博士の「本文刪修」ならびに河口懸海師のチベット訳テキストとその和訳を用いた。なお、本文校定の資料に京都大学所蔵の *Sukhāvātīvyūha* 写本（柳博士将来、69葉、各葉7行、23×9.7 cm）を参照した。

1

さて、中村博士（以下、訳註者の代表として、博士の名のみを記すことにする）の訳註の態度は、「あとがき」に

チベット訳文および漢訳文を参照すると、サンスクリット原文のテキストを訂正せねばならぬ必要が起きることがある。しかしサンスクリット原文のままでも意味が通じ得る場合には、ことさらに原文に変更を加えなかった。つまり荻原博士の訂正は採用したが、必ずしも訂正する必要がないと思ったときには、もとの写本のよみ方にしたがった。

SUKHĀVATĪVYŪHA に於ける若干の問題

と記されている。サンスクリット文献、とくに仏典の原典を読む者として誠に当然の態度であって、茲に問題がある訳ではない。しかし、この立場に立って、中村博士の訳文なり訳註を見るとき、いくつか問題の提出される点が指摘されよう。いま、その一例を「嘆仏偈」第8頌の前半で見ることしよう。

さて、この第8頌の前半の原文は刊本 (p. 8) に依れば、次のようである。

kṣetra mama udāru agrasreṣṭho |

varam iha malī saṃskṛte'smin⁷ |

v. l. (7) saṃskṛte smiṃ B. C. Several syllables are wanting; we expect some reference to the Bodhimandala.

さて、問題はこの第2行である。中村博士はこの第2行を「サンスクリット原文のまままで意味が通じ得る場合」と考え、

わたくしはむしろこの世において汚れあるものとしてこの造られたものの中にとどまろう。

と訳し、訳文中の「この世において汚れあるものとして」に註記して、

荻原博士はチベット訳を参照して非常に煩瑣な手つづきによってテキストを修正しているが、しかし写本のままで読解できるから、それに従ったらいいであろう。たとい写訳であったとしても、写本作者がそのように理解していたのであるから、それをひとまず伝える必要があるであろう。

と述べる。それでは、荻原博士の訂正はと言うと、malī の lī は古書体に於いては ṇa と酷似しており、且つチベット訳では「此の有為の中に於〔い〕て荘嚴し已りて」と記されていることから見て、この詩節は

varam iha tu pratimaṇḍya saṃskṛtesmin

のごときものと仮定し、第1詩節と併せて、

我國は寧ろ此の有為の中に於〔い〕て荘嚴して高貴第一最勝ならん。

と訳する。因に、チベット訳は

bdag gyi shin yaṅs gtso bo dam pa mchog |

'dus byas 'dir ni brgyan par bgyis nas su |

〈河口慧海師訳〉 我が国土は輕快主正最勝であって、その有為に於〔い〕て荘嚴して……

である。ところで、漢訳の所伝は例えば

〈漢訳〉 令我為世雄 国土最第一
其衆殊妙好 道場踰諸刹¹⁾

〈魏訳〉 令我作仏 国土第一²⁾
 其衆奇妙 道場超絶²⁾
 などと記される³⁾。

さて、足利先生の『大無量寿経嘆仏偈の梵文について』⁴⁾には、この偈は

kṣetra mama udāru agrasreṣṭha |

varam iha maṇḍu pi saṃskṛte 'smin |

と記され、

わが国土は高貴にして最勝最美、この有為においてげにいみじき飾りにして……と訳されている。因に、京大本には -śreṣṭho, maṇḍa とあり、他は足利刊本と同じである。なお、足利刊本の -śreṣṭha は恐らくミスプリントと考えられる。

さて、上記の資料を用いて嘆仏偈第8頌の前半を検討するにあたって、まず第一に目につくことは、漢訳所伝に見られる「道場」の語である。この訳語が一般に「道場」あるいは「菩提道場」と訳される maṇḍa- ないしは bodhimaṇḍa- であることは、今更に論ずるまでもなかるう⁵⁾。刊本の註記に「Bodhimaṇḍala へのある言及を期待する」と述べているのは、〈漢訳〉あるいは〈魏訳〉などの記事に注意したからにほかならない⁶⁾。従って、漢訳の所伝を参照し、足利刊本を知るとき、この詩節には当然 maṇḍa の存在することを考えるべきである。この意味に於いて、元來は alam-√kr̥ (莊嚴する) のチベット語訳に用いられる brgyan pa から pratimaṇḍya を想到した荻原博士は、まさに炯眼であったと言わねばならぬ。

それにも拘わらず、中村博士は「写本のままでも読解できる場合」として、前記の一切を無視して、前述のように「わたくしはむしろこの世において汚れあるものとしてとどまろう」と訳する。確かに上述の刊本のテキストは中村博士の訳文のようにも訳しえよう。しかしながら、この場合、中村博士はみずからの訳文が「嘆仏偈」の一節として、どのような意味なり価値を持っているか、考えられたのであろうか。今更に言うまでもなく、この「嘆仏偈」は Dharmākara 菩薩が世尊 Lokeśvara 如来を讃嘆し、みずから精進して buddha となり dharmasvāmin となって生類を老死より解脱させようという決意を述べたものである。従って、この決意は Sukhāvātīvyūha の中に説かれる本願の総括的ないしは序論的な提示であり、第8頌に於ける「わが国土は……」の句は後に述べられる Sukhāvātī の先駆的ないしは導入的な紹介であると言わねばならぬ。漢訳に見られる「令我為世雄」とか「令我作仏」とかは、その意を汲んで訳者が附加して、字句を整えた語である。しかも、Sukhāvātīvyūha みずから語るよう

に、Dharmākara は誓願を達成して遂に Amitābha 如来となって Sukhāvati 世界に現臨し、*anantayā buddhakṣetrasaṃpadā samanvāgataḥ* となったのであるから、この「嘆仏偈」の中で「わたくしはむしろこの世において汚れあるものとしてとどまろう」などと言う筈はないのである。この意味に於いて、中村博士の訳文は「嘆仏偈」の中では全く無意味なものとなることは明らかである。それと同時に、中村博士が前記の註の最後に

ところで注目すべきことには、ここには「生死のうちにとどまり、ニルヴァーナに入らない」
(不住涅槃) という思想が表明されている。

と記しているのは、曲解も甚だしいと言うべきである。

次に、茲の簡處で指摘される第二の誤謬は、中村博士の写本作者に対する態度である。博士は「たとい写誤であったとしても、写本作者が理解した通りに伝える必要がある」と言う。ところで、中村博士は写本作者を敬虔な阿弥陀仏の信者ないしは *Sukhāvativyūha* に説かれる教条の正確な理解者であると考えているのであろうか。刊本所依の5写本あるいはその祖型——これがいくつあるか判らないが、それらの書写者が *Sukhāvativyūha* の編述された当初からの伝承を忠実に伝えていると考えているのであろうか。周知のように、一般に写本は伝写の間に相当に変化するものであり、この点を疑う者は誰もいないであろう。一字一句も忽にしなかつたという *Veda* の学匠たちの伝承でさえ、今日までの間に *Veda* の章句の相当に多くを解釈困難にしている事実を考へてみる必要がある⁷⁾。書写の過程に於いて *lectio difficilior* が *lectio simplicior* に変えられることなどは日常茶飯事であり、各種テキストの出版に附記されている *lectio varia* を見れば、写本の書写者がサンスクリット語を果して真に正確に理解していたか疑わしい場合が極めて多い⁸⁾。 *Sukhāvativyūha* 刊本所依の5写本の場合も例外ではない。いま茲に指摘するまでもなく、刊本の脚注に記された *lectio varia* を検討すれば、容易に判明しよう。中村博士は写本作者という曖昧な表現を用いて、これがテキスト伝承の過程に於ける如何なる立場の人物であるか不明瞭であるが、少くとも *Sukhāvativyūha* の編述者ないしは原作者を指すものでないことは明かであろう。とすれば、中村博士の写本作者とは伝写のある段階に於ける書写者を意味するものであろう。ところで、写本に於ける読解不可能な簡處の発生の責任は、その伝写の過程に於けるある書写者にあることを忘れてはならない。書写者こそテキスト改竄いな改悪の元兇であり常習犯と言っても過言ではないのである⁹⁾。従って、われわれが写本を校合してテキストを研究する場合には、書写者の書写という行為の結果に依拠せ

ざるを得ないのであるが、なおそれを絶対に信頼してはならぬ、その筆跡を無条件に鵜呑みにしてはならぬ、という痛し痒しの立場に立たされているのである。結局、そこに必要なのは校訂者なり研究者の学識であり洞察力であり、そして見識であると言わねばならぬ。この意味に於いて、「写本作者の理解」ということは問題にならぬことであり、「それを伝える必要がある」ということは中村博士の見識としても、少くとも筆者にはテキスト研究にとって無意味であると思われる。もし中村博士の言葉に従うとすれば、博士が本書の中で度々行なっているような、チベット訳による読み直しをする必要は全くないのであり、むしろ筆者の『法華経』訳のようにサンスクリット語のテキストをサンスクリット語文献として読むのが当然なのではなかろうか。前後の脈絡を考えずに、自身の現在のサンスクリット読解力で「ここは意味が通じるからそのままにする」、「ここは読めないからチベット語で読み直しする」では、余りにも恣意的に過ぎるのではなかろうか。

2

次に、中村博士の註記を見ると、Sukhāvātīvyūha の読解にチベット訳の果した役割の如何に大きかったかが窺われる。ときにはペダグンティックとまで思われるほどに、チベット訳文が引用され、チベット訳に依る Umdeutung なり Textherstellung なりが目立つ。この態度は決して誤っていないし、またテキストが乱れている場合には致し方のないことである。しかし、重要な箇処にそのような配慮が見られぬのは遺憾であると言わねばならぬ。例えば、第 27 願の場合を見よう。この本文は刊本に依れば次の通りである(刊本では第 26 願)。

sacen me bhagavan bodhiprāptasya tatra buddhakṣetre yaḥ kaścit
sattvo 'laṃkārasya varṇaparyāmtam udgr̥hṇīyād āntaśo divyenāpi
cakṣuṣaivamvarṇam evamvibhūtidam buddhakṣetram iti nānāvarṇatām
jānīyān mā tāvad aham anuttarām samyaksambodhim abhisambudhye-
yam ॥

〈中村博士訳〉 世尊よ、もしも、わたくしが覺りを得た後に、かの仏国土の生ける者どもの誰かが裝飾の美しさの限界をとらえていて、たとい超人的な透視力(天眼)によってであったとしても、『この仏国土はこのような美しさである、このような壮麗さである。』と、種々の美しさを知っているようなことがあるようであったら、その間はわたくしは、この上ない正しい

SUKHĀVATĪVYŪHA に於ける若干の問題

覺りを現に覺ることがありませんように。

ところで、〈魏訳〉も

設我得仏、国中人天一切萬物、嚴淨光麗、形色殊特、窮微極妙、無能称量、其諸衆生、乃至逮得天眼、有能明了辯其名数者、不取正覺。

となっている。従って、中村博士の訳はこのままでは全く問題とするところはない。しかし、その前後を見ると、必ず「……できないようであったら」とか「……しないようであったら」と否定的な表現があって、そのような場合に「その間は、わたくしは覺りに達することがないように」という Dharmākara の誓願が述べられている。それにも拘わらず、この第 27 願のみに否定的表現は見られない。しかも、文意から見て、「ある有情が天眼によってでも仏国土の美しさ・壮麗さを知らないようであったら……」と否定的表現のあるのが誓願の主旨に適うようである。事実、チベット訳には

…… she kha dog tha dad pa dag 'tshal ba ma gyur pa de srid du ……

〴〵と、種々の色などを求めるようにならないならば、その間は……〴

と明瞭に否定辞が見られ、京大本 (14 b 6) にも

-grhñiyād antaśo na divyena cakṣuṣā eva[ṛ]varṇa evaṃvibhūtir iti
buddhakṣetram iti nānāvarṇatām saṃjāniyān ……

と記されている。因に、足利先生使用写本の写真も見せて頂く機会を持ったが、これにも明かに na の語が見え、上記京大本と全く一致することが確かめられた。このことは Sukhāvatiṣyūha の原典史に一つの問題を提供する事実で、すなわち Sukhāvatiṣyūha の原典に 2 系統があり、第 1 系統は第 27 願に否定辞 na を持ち、第 2 系統は na を持たないもので、両系統の分裂は〈魏訳〉の訳出年次 (A. D. 252) に遡ることであり、またチベット訳は第 1 系統に属し、〈魏訳〉は第 2 系統に属することなどである。

ところで、東大本 4 種と大谷本を検討した荻原博士は必ずやいずれかの写本に na の語をたどりえたのではないかと思われるが、〈魏訳〉によってこれを写誤と見たらしく、註記はなく、訳文にも否定的表現は見られない。中村博士は恐らくは荻原博士の訳に無批判に従ったらしく、チベット訳に於ける表現についてはなにも触れていない。チベット訳をペダンティックなまでに引用し、しかもチベットの姿容¹⁰⁾ということを重視される博士が、この点に触れていないのは、なんとしても不可解である。博士はこの箇処だけチベット訳を見なかったのであろうか。それとも、前記の点に気づいてはいたが、〈魏訳〉を尊重する教団への遠慮から頬被りをしたのであろうか。

ところが、中村博士がチベット訳は勿論のこと、〈魏訳〉さえ無視したことがある。それは第 49 願に関してである。いま、本文（刊本では第 46）を引用すると、

sacen me bhagavan bodhiprāptasya buddhaśāstur buddhakṣetreṣu te bodhisattvā mama nāmadheyam śṛṇuyus te sahanāmadheyaśravaṇāt prathamadvitīyatṛtīyāḥ kṣāntiḥ pratilabheran nāvaivartikā bhavyeur buddhadharmasamghebyo mā tāvad ……

となっており、荻原博士は「藏漢兩訳により」

① buddhaśāstur buddhakṣetreṣu te bodhi° を tad anyeṣu buddhakṣetreṣu ye bodhi° と訂正。

② -samgho を削除。

の二点を指摘する。この二点に関しては京大本によっても正しい。しかし、チベット訳には

dañ po dañ, gñis pa dañ, gsum pa thob par ma gyur pa dañ, sañs rgyas kyi chos rnam las phyir mi ldog par ma gyur pa de srid du ……

「第一、第二、第三のものを得ないで、仏の諸法から不退転とならないその間は……」

とあり、〈魏訳〉にも

不即得至第一第二第三法忍，於諸仏法，不能即得不退転者……

と、いずれも否定的表現が二重に明瞭に認められる。それにも拘わらず、荻原博士は全然この点に触れることなく、中村博士もそうである。ところで、京大本 (18a 5) には

-śravaṇān na prathamadvitīyatṛtīyāḥ kṣānti pratilabheran nāvaivartti° と二重に否定辞 na が見られ、チベット訳ならびに〈魏訳〉と同じである。意味内容から見ても、これが正鵠をえたものであることは疑う余地がない。

ところが、また、中村博士が無批判にチベット訳、と言うより河口師の和訳を採用している場合もある。一例を挙げると、刊本 39.3 に於ける dhāturaṣṭropasobhita- の訳である。この訳は Sukhāvati に於ける河川を讚美した一節に見られ、その河水には各種の芳香の薫りが満ち、河中には各種の蓮華が咲き乱れ、河岸には白鳥などの各種の鳥が集い遊ぶ旨を記したあとに、

-pakṣisamghanīṣevitapulinā dhāturaṣṭropasobhitāḥ supatīrthā vikardamāḥ suvarṇavālukāsamkirṇāḥ

と記される。中村博士は

(その河岸は) 雁で飾られ、沐浴に都合のよい階段があり、泥はなく、黄金の砂が振り撒かれ

ている。

という訳を記す。supatīrtha- を『マハーバーラタ』などに見られる sūpatīrtha- の転訛と見て、「沐浴に都合のよい階段」と訳したのは正しいのであるが、dhāturāṣṭra- を何故に「雁」と訳したのであろうか。サンスクリット語の単語としての dhāturāṣṭra- に「雁」という意味はない。それにも拘わらず、荻原博士も「雁」と訳しており、河口慧海師もチベット訳の和訳にこの訳語を用いている。ところで、チベット訳の原語はと言うと、チベット訳には

ñān pa dañ ñān pa'i rgyal po rnam kyis mdses par byas pa dañ.

〈河口慧海師訳〉 雁と雁王等により美はしく荘嚴せられ

と記される。すなわち、チベット訳は dhāturāṣṭra- を二語と見て ñān と ñān pa'i rgyal po と訳しているのであるが、ñān (pa) は発音はガンであろうが「雁」ではなく、haṃsa「白鳥」である。このことは DAS : A Tib. Eng. Dic. を見ても、Tibetan Sanskrit Dictionary, ed. by Lokesh CHANDRA を見ても明かであり、また J. BACOT の出版した Dictionnaire Tibétain-Sanscrit par Che riñ dbañ rgyal (40 a 2) を見てもそうである。従って、ñān pa'i rgyal po は rājahaṃsa である。ところで、チベット訳では、その前に見られる haṃsa には bya ñān (bya とは「鳥」のこと) の語を当てているのであるが、河口師はその場合にも「雁」の訳語を用いている。もっとも ñān を ñān skya の略と見ることもできよう。これは漢訳では「雁」とされ (Mahāvvyutpatti 4882)、これに対応するサンスクリット語は dhārtarāṣṭra である。それと同時に、ñān pa'i rgyal po は dhṛtarāṣṭra の訳語としても用いられる (Skt. Tib. Dic. ed. L. CHANDRA, s. v.)。従って、チベット訳の訳者は dhāturāṣṭra- を dhārtarāṣṭra の転訛と見て訳そうとしたが、恐らくは自信がなくて ñān skya を ñān とし、さらに dhṛtarāṣṭra の訳語 ñān pa'i rgyal po を附加して、いわば糊塗したのではなかったかと思われる。ところが、dhārtarāṣṭra は「雁」ではなく、「鶖鳥」の一種である。しかし、雁も鶖鳥も鴨科の鳥であるから、もしチベット訳を採るとするならば、むしろ「鴨」と訳すべきであろう。荻原博士の場合、何故に「雁」と訳されたか、註記もなく、今日では全く不明であるが、中村博士の場合には、その註記の仕方から見て、少なくとも註記があって然るべきではなかったかと思われる。

その他、sāradam vanadam (刊本 3. 2) に関する博士の便宜的解釈など、いくつか論ずべき点があろうが、ここでは省略する。

3

次に、本書を繙いて驚いたことは、サンスクリット語テキストの訳文の中に突如として〈魏訳〉から「五悪段」の条が和訳されて編入されていることである。サンスクリット語のテキストには勿論、チベット訳にもない「五悪段」の条をサンスクリット語テキストの和訳の中に編入するとは、博士は当然 そうあるべきものと考えたからであろうか。もしそうであるならば、中村博士は *Sukhāvātīvyūha* を含めて浄土教思想を論じたりする資格がないと言われても仕方がないであろう。そうではなくて、どこかからの要請により妥協したとも考えられようが、この種の妥協は中村博士が学者であるかぎり断乎として斥けるべき性質のものであろう。

それと同時に、この「五悪段」の編入の場所がまことにまずい。中村博士の訳文の章節は刊本のそれに従っている。すなわち、(38) に於いてブッダはアーナンダに対して仏国土に於ける *bodhisattva* たちの有様を告げているのであるが、そのあとに突如としてマイトレーヤ(弥勒)を対告者とする「五悪段」の訳文が編入され、そして(39) に於いて再びアーナンダが対告者であり、(40) 以下はすべてマイトレーヤが登場するのである。この編纂形式にしたのは〈魏訳〉のそれに従うたものであろうが、これこそ〈魏訳〉に於ける問題点と考えるべきであり、「五悪段」の条が〈魏訳〉に於いてさえ既に後から編入された事実を示すと言ってもよいかと思う。いずれにせよ、*Sukhāvātīvyūha* はその構成上(39)と(40)の間で区別されるのであって、この事実に基づくことなく、無批判に〈魏訳〉の編纂方式を踏襲したとすれば、博士の考えの甘さは責められても仕方がないであろう。

4

さて、中村博士は『浄土三部経』(下)の末尾(pp. 191—210)に「解説」を記し、「極楽浄土の観念の起源」とか「浄土経典の成立年代と地域」とか、いくつかの問題をいわばアトランダムに論じている。その中には拙著『仏教入門』を前に置いて駁論を書かれたかと思われるようなふしがないではないが、そのようなことは今の場合どうでもよい。ただ問題は博士の記述が実に散漫で、考えが浅いということである。いまその一例として「無量寿仏のすがた」という一節に於ける光明に関する記述を採り上げてみよ

う。

まず第一に、博士は「無量光」の観念は光を尊ぶインド古代の思想にもとづいていると言ひ、『大無量寿経』に見られる無量光仏の光の廣大無辺なことを讃えた詩は諸ウパニシャッドや『バガヴァッド・ギーター』に於ける伝統的な表現を受けたものであるという。

ところで、博士に借問してみたい。以下、箇条書きにする。

- ① 「光を尊ぶインド古代の思想」と言われるが、Licht いな Machtglanz の Veda の宗教に於ける意義を考へてみられたであろうか。
- ② Machtglanz の根源としての太陽神 Sūrya のインド宗教史に於ける位置を考へられたであろうか。
- ③ 「Bhagavadgītā などに於ける伝統的な表現」と言われるが、無量光の観念が突如として Sukhāvativyūha に受け継がれるに至ったと結論するについて、どのような宗教史的背景があるか考へられたのであろうか。
- ④ ヒンドゥ教に於ける Machtglanz の観念について宗教史的に刻銘にたどってみられたのであろうか。

など、設問は限りなく展開するが、今の場合このくらいにしておこう。

次に、無量寿仏の項（うなじ）にあるといわれる円光について、円光はジャイナ教の祖師・高僧の絵画に常に描かれているから、仏教特有ではなく、これと一緒に考察さるべきだと、博士は言う。正にその通りである。しかし、博士に伺いたい。

- ⑤ ジャイナ教の絵画に於ける円光は、何時の時代に始まり、どのような展開をしたか考へられたのであろうか。

次いで、博士はカトリック教の聖者像に円光があり、アメリカ・インディアンの間では英雄の像に円光を附していることから見て、「人間そのものの心性に由来するものか」といつてよいであろうか」と言う。そこで、博士に伺いたい。

- ⑥ キリスト教に於ける光背・光輪 (nimbus, aureole, fortuna など) について、DIDRON などキリスト教の Iconography に関する書物を読んで検討されたであろうか。

と。特に、この場合、少し古いが STRZYGOWSKI, J.: Ursprung der christlichen Kirchenkunst, Leipzig 1920 は極めて興味深い著述であろう。

中村博士はアメリカ・インディアンの例を挙げて、円光は人間そのものの心性に由来すると結論したいようであるが、いま仮りにそれを認容するとして、

- ⑦ インドに於ける光輪・光背の歴史を、博士はどのように考えようとするのであろうか。

今の場合、アメリカ・インディアンの例は別問題である。それは何故かと言うと、以下に述べる文化史的事実に注目して頂きたい。インドで光輪が最初に跡づけられるのは、西暦2世紀に於ける Mathurā 仏であるが（筆者は『仏教入門』に於いて誤って3世紀としたが、その後水野清一博士から指摘され、同書再版では2世紀に改めた）、Mathurā 仏に至るまでに、インドに於いて——例えば Veda 文献あるいは原始仏教文献に光輪なり光背が明確な記載をのこしていないかぎり、インドの太古に於ける光輪・光背の歴史はたどれないであろう。これに対し、西暦2世紀と言えば、博士が常に問題にしているクシャーン帝国の盛時であり、西はローマ領オリエントから東は中央アジアを経て遠く中国まで文化の交流が激しく行われた時代である。そして、イラン地域には古くから *Hvarānah* (Machtglanz) が尊崇され、宗教的には勿論、広く文化的にも大きくクローズ・アップされているのであり (SÖDERBLOM, N.: *Das Werden des Gottesglaubens*, 2. Aufl. Leipzig 1926; STRZYGOWSKI, J.: op. cit. 参照), 特にミストラ教に於けるこの観念とその表象の文化史的意義を絶対に見過すことはできない。西暦紀元前より西北インドもその影響の下にあったことを忘れてはならない¹¹⁾。中村博士の共同者の一人も「浄土教展開の外的基盤」の一項目として、「外来民族（ペルシア、イラン、ギリシア、サカ人など）の侵入とその文化との接触・交流」を指摘しているが（下巻 p. 211）、さらにひろくイランの宗教・文化に関する代表的著作の二三を中村博士にして検討されるならば、博士の浄土教思想に対する見解はさらに深まり、一層体系的となろう。筆者が『仏教入門』 pp. 175—177 で光の理念を西アジアに遡源したについては、上記の博士に対する設問のいくつかを慎重に考慮し、且つ上記の STRZYGOWSKI の著書（1920）以後の約40年間に発表されたイランの宗教・文化に関する諸研究（例えば F. CUMONT, H. LOMMEL, H. S. NYBERG, R. C. ZAEHNER などの著書）を検討した結果であることを申し述べておく。なお *Sukhāvativyūha* を中心に阿弥陀仏・極楽などの問題に関し、近く專著を公にしたいと準備中であることも附言しておきたい。（64.11.5）

（筆者は京都大学文学部講師）

註

- 1) 「大正藏」XII. 280 c.
- 2) 同上 267 b.
- 3) 〈呉訳〉には偈頌なく、〈唐訳〉と〈宋訳〉とは意識している。

SUKHĀVATĪVYŪHA に於ける若干の問題

- 4) 「仏教学研究」8.9, 昭 28。
- 5) 「正法華」, 「妙法華」にはこの訳語がしばしば見られることに注意せよ。
- 6) 刊行当時すなわち1883年ごろには, bodhimaṇḍa という語は未だ知られてはいなかったと考えられ, 「道場」の訳語の原語は bodhimaṇḍala と考えられたと思われる。
- 7) s. WACKERNAGEL, J.: Altindische Grammatik, I. Göttingen 1896, S. X.
- 8) 近く発表される筆者の Lexikalische Nachlesen aus dem Saddharmapuṇḍarīka, I. aṣṭāpada, Acta asiatica IX 掲載予定 を見よ。この論文は Sp. 65.9 以下5回見られる aṣṭāpada の語が元来 aṣṭāpaṭṭa (lectio difficilior) を書写者が理解しえないで, aṣṭāpada (lectio simplicior) と書き換えた結果であることを論じたものである。なお, また, 筆者の『梵文仏典の原典批判について』「印度学仏教学研究」Vol. VI (1958), Part 1, pp. 298-295 を参照せよ。
- 9) 筆者がテキストを出版した Sumāgadhāvadāna の場合に於ける MS C とその写しである MS C' および MS P の関係を見れば, このことが明瞭に理解されよう。The Sumāgadhāvadāna. A Buddhist Legend, ed. by Y. IWAMOTO, Tokyo 1959, p. 2-3. なお, 筆者の上記『梵文仏典の原典批判について』には, 『金光明経』捨身品の一偈を校訂者 (これは現在の段階に於ける書写者である) がテキストを改悪した一例が見られる。
- 10) 中村元『極楽浄土の観念のインド的解明とチベットの姿容』「印度学仏教学研究」Vol. XI (1963), Part 2. pp. 131-153
- 11) 西紀前2世紀の中葉ごろにインドに侵入した Parthia の Mithridates I (ca. 171-138/7, F. ALTHEIM に依る) はその名から見ても Mithra 信者であり (cf. NYBERG, H. S.: Die Religionen des alten Iran, Leipzig 1938, S. 405), そののち西北インドに mitra の名のつく王が多く, 且つ Pañcāla 地方には Mitra 王朝があったが, これらは古くから存在した東部イランに於ける Mithra 集団(s. NYBERG, S. 52-85) と何等かの関係があるのかも知れない。なお, NARAIN, A. K.: The Indo-Greeks, Oxford 1957, pp. 44, 63, 86, 122 etc.; CHATTOPADHYAYA, S.: Early History of North India, Calcutta 1958, pp. 40, 85 など参照。なお, 5世紀ごろ西インドの Kāthiāwār 半島の Vallabhī に拠った Maitraka 朝は明かに Mithra 信仰集団の後裔であった (DE LA VALLÉE POUSSIN, L.: Dynasties et histoire de l'Inde depuis Kanishka jusqu'aux invasions musulmanes, Paris 1935, p. 136)。